

ガイドラインでは、記載（説明）と関連するページについて、適宜参照ができるように、参照先のページと項目を紹介しています。

（例：（参照：p.109「**3** 自転車の通行方法と通行場所【歩道】」））

参照ページを御覧になる場合は、参照先の記載部分（下図赤枠部分）をクリックしていただくと、そのページが表示されます。

※ ガイドラインの参照ページが新しいウィンドウで開きます。

※ 下図はクリック箇所を例として示すものであり、実際にはガイドライン本文中に下図のような赤枠はありません。

目 次	
<b>1 はじめに（自転車を取り巻く情勢）</b>	<b>1</b>
<b>2 ガイドラインのポイント</b>	<b>3</b>
(1) ガイドラインの目的	3
(2) ガイドラインの構成	3
(3) ライフステージごとの交通安全教育の目標	4
(4) ライフステージごとの教育内容	7
(5) 教育主体別の教育内容・教育方法例	8



**7 歩道で車道寄りを通行しなければならない理由**  
 （参照：p.109「**3** 自転車の通行方法と通行場所【歩道】」）

普通自転車で歩道を通行するときに、歩道の中央から車道寄りの部分を通行しなければならないのは、道路外の施設や交差道路から出てくる自動車との距離を確保して、自動車から自転車を発見しやすくし、ブレーキをかける時間を確保し、事故を防止するため。

「知識」の教育内容（★は重点的に教育すべき事項）			
項目	重点	習得すべき目標	参照
信号機の信号等に従う義務	★	・基本的な信号の意味（「青」は進むことができる、「赤」は止まる）を理解している	p.112 <b>8</b>
徐行すべき場所	★	・身の周りの徐行すべき場所で、ゆっくり走らなければならないことを理解している	p.113 <b>9</b> p.16 <b>1</b>

**5 各教育主体の教育内容と教育方法の例**

(1) 販売事業者

**特色**

- 多くの自転車利用者と接する機会があり、自転車の種類ごとの知見を有する。
- 実際に乗る運転者と自転車に応じた教育内容を選択できるほか、自転車に乗るこどもの保護者も含めてアドバイスを行うことにより、家庭における交通安全意識の醸成が期待できる。
- 販売時等に効果的な教育を行うとともに、自転車購入者に対する教材を配布することができる。

**主な教育の対象**

全ライフステージ  
 ※ p.14「未就学児」、p.20「小学生（1～3年生）」、p.27「小学生（4～6年生）」、p.37「中学生」、p.46「高校生」、p.54「成人」、p.64「高齢者」参照

**6 基本的な自転車の交通ルール**

\*p.126「付録2」に基本的な交通ルールの一覧表を掲載しています。

**1 道路交通法上の自転車の位置付け**

小学生（1～3年生）から

・道路交通法では、自転車は「軽車両」と位置付けられ、自動車と同じ「車両」の一種です。  
 ・自転車には、一定の基準を満たす「普通自転車」のほか、タンDEM自転車やペロタクシー等、様々な種類があります。

【車両】

- ・自動車
- ・原動機付自転車
- ・軽車両
- ・自転車（リヤカー等）

くるま

【歩行者】

ひと

\*自転車（側車付き・牽引している自転車は除く。）を押して歩く場合は、歩行者とみなされます。

※「6 基本的な自転車の交通ルール」のページでは、**1** ～ **22** のタイトル部分をクリックすると、警察庁が令和7年9月に作成・公表した【自転車ルールブック】の関連ページが表示されます。